「がん」を知るフォーラムinいちのせき

「がん」から看取りまで 最期まで自分らしく 生き抜く方法を考える

1981年以降、死亡原因の1位は「がん」。現在は、2人に1人ががんになるともいわれている。

一関在宅緩和支援ネットワーク（IZAK）主催の「『がん』を知るフォーラムinいちのせき2012」は2月9日、一関文化センター中ホールで行われ、がん医療の開拓記などを描くノンフィクション作家で評論家の柳田邦男さんが「豊かな生と死を考える」をテーマに講演した。客席は満席。医療に関する関心の高さがうかがえた。

県内の在宅で看取る割合はわずか7％。一関市内はその半数以下の3％だ。つまり、ほとんどが病院で亡くなるという。死ぬ場所として病院はふさわしいのだろうか。医師は痛みを和らげることはできる。しかし、心のケアや生活を支えるのは家族や周りの人たちだ。治す医療から支える医療、全人的ケアへとウエートは移り始めており、医師、看護師、ケアマネージャー、介護員、ボランティアが同じ視点で患者と向き合っていかなければならない。

柳田さんは「死を否定的に考えず、いかに最期まで生き切るかを考えるべき」と話し、生き直す力を見つける大切さを訴えた。

講演に続き、「自宅で看取るということ」と題したシンポジウムが行われ、訪問看護師や患者の家族などが、それぞれの立場から意見を交換した。参加者は、治療の進展や緩和ケアの普及で、がんに対するとらえ方が変わってきている現実を学んだ。

Step_2

学んで

住民、医療、保健、福祉、行政が対話する場を
「NPO法人地域医療を育てる会」に学ぶ

藤本晴枝　ふじもと・はるえ
NPO法人地域医療を育てる会理事長。1996年東京から千葉県東金市に移住。ボランティア活動をしながら04年、山武地域医療センター構想策定委員会アドバイザーに就任。05年4月、地域医療を育てる会を設立、理事長に就任

医師が不足、病院が不足。では、医師を増やせば健康な人は増えるのでしょうか。病院を増やしたら安心して暮らせるのでしょうか――。

目から鱗（うろこ）の言葉の数々は、本気で地域医療を守り、支え、育ててきた藤本さんだからこそ。「健康も、安心も、人任せではなく、自分でつくるもの。住民、医療、保健、福祉、行政などが連携し、支え合って暮らせる地域をつくるべきです」と一人一人の意識を変えない限り、健康や安心を手に入れることはできないと訴えた。

NPO法人「地域医療を育てる会」（会員25人）理事長の藤本晴枝さん。「対話する地域医療」を育てようと2005年4月に会を立ち上げた（同年11月にNPO法人に）。住民、医療、保健、福祉、行政などさまざまな立場の人たちが集まり、対等な立場で互いの知恵と力を出し合う場を創出している。

藤本さんが住む東金市は、千葉県東部の山武地域（東金市、山武市、大網白里市、横芝光町、九十九里町、芝山町）にある。都心に医師が集中するため、東京周辺地域の医師数は全国平均を下回る。その中でも山武地域の医師数は千葉県で最も少なく、全国平均の半数だ。

以前、藤本さんが、あるシンポジウムに参加した際、住民は「～してほしい」「～してくれない」と言い、行政や医療関係者は「理解とご協力をお願いします」を繰り返していたという。住民は「～してくれ」と誰かに依存するだけでいいのか？　行政や医療関係者だけが対策を考えなければならないのか？　医療機関は、必要な情報を住民に伝えているのか？　こうした疑問が、藤本さんを動かした。

「地域医療を育てる会」の活動の一つは、情報発信。情報紙や絵本などを作成し、医療や行政が困っていることは何か、問題解決のためには何ができるのかを訴えた。「自分の都合で病院にかかると医師の負担は大きくなる。それを止めることが、医師不足の解消に大切なこと」と広く知らせる必要があった。

絵本「くませんせいのSOS」を鈴木優杏（ゆあん）さん（小4）、鈴木至桜（しおう）君（小1）、伊藤蓮久（れく）君（小2）、高橋柊碧（とあ）さん（小2）、渡邊柑生（かお）君（小1）の5人が朗読

しかし、情報発信は一方通行。分からないことや聞きたいことがある時に、みんなで話し合う場が必要だった。

「何が問題かを話し合い、どうしたらいいのかを考える、対話の場所が必要でした」と藤本理事長は振り返る。

今後の課題は「病気予防」。検診を受けない人や健康に気を付けようとしない人をどうするかだ。

大切な人のためにいつまでも健康でいたいと願い、健康を気遣う人が多い地域は、人間関係が良好なコミュニティーが多いという。

「人は一人では生きていけません。誰かのために生きたい、誰かの支えになりたい、そう思える誰かに出会える地域づくりをしましょう。コミュニティーの力が健康をつくるのです」ときっぱり。

自分が変われば地域が変わる。地域が変われば医療が変わる。もうお客さまではいられない。東金の医療を救った信念は、今でも変わらない。

子供のいざという時の相談窓口

●おかあさんのための救急＆予防サイト「こどもの救急」　夜間や休日など診療時間外に病院で受診するかどうかの判断の参考になるホームページです。子供の状態をクリックして、救急車を呼ぶか、病院に行くか、家で様子を見るかの判断材料にしてください。
ホームページ　http://kodomo-qq.jp/

●こども救急電話相談　夜間に子どもの具合が悪くなったとき、まずは相談してください。看護師が相談に応じます。
☎019-605-9000または☎#8000

Step_3

伝えて

一人一人の意識が地域、医療を変え、古里の地域医療を育てる糧になる

朝顔のたねをはじめ、いくつものボランティア団体が活動する一関市を視察する人は少なくない。

兵庫県北部の香美町（かみちょう）は人口2万人。高齢化率は県内で最も高い34％だ。同町地域医療対策室の尾崎桂子（けいこ）室長は、本市の取り組みを注目する一人。医師不足をはじめ、香美町の医療は厳しい状況だ。

尾崎室長は「住民と医療者が互いに分かり合おうとしている姿は、すごいです」と驚く。さらに、「誰もが生まれ育った古里へ愛着があります。ずっと安心して暮らすためには、何をすべきかを医療関係者だけでなく、住民が一緒に考えなければいけません。それが実行され、ボランティア活動など地域を動かす力につながっているのですね」とも。

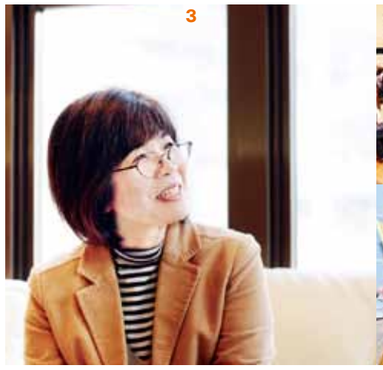
香美町も地域医療のフォーラムや巡回講座を開いて、関係を深めているという。それを確実に機能させるためにも、「住民組織は不可欠」と感じている。

病気を治す医療の時代、患者は受け身だった。だが、これまでと打って変わり、自分たちの医療として考えていかなければならない時代を迎えている。

医師でない私たちが医療を施すことはできない。だが、医師が働きやすいまち、医師が暮らしやすいまちをつくることはできる。居心地の良い病院、医師との良好な人間関係を築いていくことはできる。

「病院はおらほの町の宝」だ。宝を知り、学び、そして多くの人へ伝えていくことは、安心して暮らせる地域を守り、育てることでもある。

あなたにも、きっとできることがあるはず。



1＿多くの参加者が講演を熱心に聴いた／2＿会場には千厩高校美術部が作成した「地域医療を守る」をテーマにしたポスターも展示された／3＿兵庫県香美町健康課地域医療対策室の尾崎桂子室長